

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現

——余 滴——

高 橋 尚 夫

は し が き

慶喜蔵 (Ānandagarbha 8～9世紀) 作『金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 (Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikasarvavajrodaya)』は初会金剛頂經『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王經 (Sarvatathāgatamahāyānābhisamayo nāma mahākālparājah)』(『真実撰經』)に基づいた瑜伽実習の次第儀軌である。その内容については後に略述するが、瑜伽密教における灌頂作法を詳説した儀軌として、我が真言密教の灌頂軌の典拠となる『金剛頂瑜伽中略出念誦經』とも密接な関係を有する重要な作品である。北京版西藏大藏經の葉数によれば57枚程の中篇である。梵文写本が全体の約半分程見出だされており、筆者並びに密教聖典研究会の手によって一応の全訳が提出された。

- I 拙稿「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 第一瑜伽三摩地品一和訳一」密教文化161号 昭和63年
- II 密教聖典研究会「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya 一梵文テキストと和訳一(I)」大正大学総合仏教研究所年報第8号 昭和61年
- III 密教聖典研究会「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya 一梵文テキストと和訳一(II)」大正大学総合仏教研究所年報第9号 昭和62年

Ⅳ 拙稿「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一和訳一完」豊山学報第32号
昭和62年

以上の四篇であるが、先に一応の全訳と述べたのは、Ⅰ、Ⅳはチベット語からの翻訳であり、Ⅱ、Ⅲは梵文からの翻訳という変則性を指したものである。翻訳の経緯並びに梵文資料については各論文のはしがきに詳しいので省略するが、密教聖典研究会の手になる「梵文テキストと和訳」は筆者が草稿したものに研究会の諸氏が検討を加え、補筆訂正をほどこしたものである。よって筆者の論文ではないが、研究会諸氏の了解のもと活用させていただいており、ここに研究会の諸氏に甚深の謝意を表するものである。いづれチベット語からの全訳を統一し、チベット語テキストと共に研究を含め上梓したく準備を進めている所である。

さて、本稿について一言すれば、先にⅣの拙稿の追記に述べたところであるが、一応の全訳を終えた所、大正大学森口光俊氏より当該個所の梵文写本が存在することを教示された。先に、密教聖典研究会で校訂した写本は全体の3分の1程であったが、その後、12葉が見出だされたものである。Ⅳの拙稿はⅢの梵本が途中20葉欠落している部分を補ったものであり、そのうちの12葉が発見されたわけである。以下判り易く梵本の存在する個所を図示すれば次の如くである。先づ今までの分を図示すると

	筆者による 節番号	北京版葉数	梵 本	備 考
1	§1~§67	1b~20a	欠 (20枚)	Ⅰ 拙 稿
2	§68~§126	20a~36b	21a~39b (19枚)	Ⅱ, Ⅲ 密教聖典研究会
3	§126~§150	36b~52a	欠 (20枚)	Ⅳ 拙 稿
4	§151~§171	52a~57b	60a~66a (7枚)	Ⅲ 密教聖典研究会

である。このうち3の部分の欠落した20葉のうち12葉が見出だされたわけである。その内訳は

	筆者による節番号	梵 本
1	§126~§128 (東方 168)	40a~41b (2枚)
2	§128 (東方 169~西方 162)	[42a~44b (3枚)] 欠
3	§128 (南方 163~北方 239)	45a~49b (5枚)
4	§128 (北方 240)~§136	[50a~51b (2枚)] 欠
5	§136~§143 (6)	52a~56b (5枚)
6	§143 (7)~§151	[57a~59b (3枚)] 欠

となる。発見者である森口氏の寛大なる御高配により、1と3の部分すなわち賢劫千仏名の部分（7枚）は同氏が校訂¹⁾発表し、5の部分（5枚）を筆者が校訂させていただくことになった。同氏に対し甚深なる感謝を表するものである。

なお、本稿は、すでにチベット語からの和訳を発表しており梵文校訂のみを提出すればすむことであるが、多少チベット訳とは相違する所もあり、梵本が出たことによって誤訳も見出だされたので、梵文からの和訳も附した。また、統一を計るために、先に密教聖典研究会による「梵文テキストと和訳」に附した節番号を通し番号に振り直した訂正表を附した。ご面倒でも振り直していただければ幸いである。なお、本儀軌に所出する真言を所出の順に番号を振り、抽出した。何かの参考になろうかと考え附録に附した。

略 号

Ms. Short Title. *Bauddhamañḍaladevatānāmāvali*

No. of leaves: 12 Size: 28×4.5cm Remarks: palm-leaf Manuscript No. I-1697. vi *bauddhastotra* 19; NEPAL-GERMAN MANUSCRIPT PRESERVATION PROJECT National Archives, Kathmandu, Nepal.

SVU (Ⅰ) 密教聖典研究会「*Vajradhātumahāmañḍalopāyika-Sarvavajrodaya*—梵文テキストと和訳—(Ⅰ)」大正大学総合仏教研究所年報第8号 昭和61年

SVU (Ⅱ) 同上「(Ⅱ)」同第9号 昭和62年

P 西藏大蔵経北京版 (大谷目録 No. 3339: Vajradhātumahāmaṇḍa-
lopāyikāsarvavajrodaya nāma 1~57b)

D 西藏大蔵経デルゲ版 (東北目録 No. 2516: 1~50a)

N 西藏大蔵経ナルタン版 (大正壬生目録 No. 1337: 1~50b)

Tib 上記三本に共通する場合

H 堀内寛仁編著『初会金剛頂経の研究』上, 下, 密教文化研究所 昭和58年

R 『金剛頂瑜伽中略出念誦経』国訳 (拙訳)「两部大経」(上)所収, 真言宗豊山派宗務所編 昭和58年

DP. Sk. T. Skorupski; "The Sarvadurgatipariśodhana Tantra, Elimination of all Evil Destinies", Delhi, 1983

なお, テキスト校訂にあたって, daṇḍa の補訂削除, 不正規な saṃdhi の訂正, 及び本写本の特徴である, 語中の y の前の r の脱落 (e. g. kuyāt < kuryāt) の補訂は注記を省いた。また, 当初はチベット訳との対称テキストを提出する予定であったが紙数の都合によりチベット訳テキストを省いた。よって Variants に Tib よりの補訂表記が最少限となっている。了とされたい。

1) 森口光俊「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya 梵文テキスト補欠—新出写本・蔵・漢対照賢劫千仏名を中心として—」智山学報第38輯 予定。

Vajradhātumahāmaṇḍalopāyika-Sarvavajrodaya

—梵文テキストと和訳—

§136 ~ §143 (6)

§136

(52a) x x sarva¹⁾śadhibhiḥ śāliyavagodhūmatilamāśaiḥ sarva-
dhānyaiḥ sugandhodakasitasugandhair kusumaiś ca paripūrṇam
samantato gandhopalīptam sragvinam śrīvajrasattvavajrāṅkitam /
sadvastrābaddhakaṇṭhakaṁ satpallivaphalavaktram vajrasattvena
sattvavajrīparigrhitayā vajrakusumalatayāṣṭottaraśatajaptam /

②⑧ om vajrodaka hūṁ //

iti punar aṣṭottarasahasrābhimantritam kṛtvā / bhagavato vajra-
sattvasyāgrataḥ sthāpayet praveśadvārābhīmukham ca dvitīyam²⁾
vajrasattvenāṣṭottaraśatajaptam / tenodakenātmānam abhiśiñcya³⁾
praveśyakāle śiṣyam⁴⁾ vajrasattvavajrīm badhniyāt / bandhayed⁵⁾
vā / śrīvairocanādīnām tu kalaśam pratyekam svacihnam bāhya-
maṇḍalabāhyataḥ koṇeṣu teṣām svamantrair aṣṭottaraśatajaptam⁶⁾
sthāpayet / teṣām api bāhyataḥ pūrṇakumbham / abhāve

1) Ms. xxxx śadhibhiḥ

2) Ms. cāḥ

3) Ms. °cyā

4) Ms. °yām

5) Ms. yandhayed

6) Ms. piṣṭa ?

§136

……あらゆる薬、米、大麦、小麦、胡麻、豆等のあらゆる穀物、妙香水や
白い妙なる香りのする花によって満ち、(瓶の)周りは塗香で塗られ、花環
をつけ、吉祥なる金剛薩埵(そのものである)金剛(杵)の標のついた、首を
美しい布で縛り、美しい枝葉や果実で口は(いっぱい)である(瓶)を、金剛
薩埵の(真言)¹⁾によって薩埵金剛女(印)にて把んだ金剛(杵)と花咲く蔓草を
もって百八度び誦(すべし)。さらに、

②⑧ オーン 金剛水よ フーン

という(真言)を千八度び加持して、具徳金剛薩埵の面前に置くべし。また、
金剛薩埵の(真言)にて百八度び唱えた第二の(瓶)を遍入の門に面前(さす
べし)。その水をもって自身を灌頂し、²⁾遍入に際し、弟子に(対し)金剛薩
埵金剛女(印)(遍入の印)を結び、或は(弟子に)結ばさせるべし。吉祥なる
毘盧遮那(如来)等の瓶も各々、各自の標幟を(なして)、外輪の外隅にそ
れらの各自のマントラにて百八度び唱えて置くべし。それらの外側にも水
差しを(置くべし)。

1) 金剛薩埵の真言 ; om vajrasattva hūṁ /

2) チベット語の和訳にては bdag ñid を弟子をとったが、改める。DP.Sk. p.258,
1.9 には ātmaśiṣyābhiṣekaṁ kṛtvā (自身と弟子を灌頂し)とある。

śrīvajrasattvasya pañcatathāgatānām¹⁾ ca kalaśāt pūrṇakumbhaṃ²⁾
ca dattvā / sattvaratnadharmakarmavajrāṅkaṃ svakulamāntrair³⁾
aṣṭottaraśatābhijaptam / kalaśacatuṣṭayaṃ⁴⁾ pūrṇakumbhacatuṣṭa-
yaṃ⁵⁾ ca dadyāt / daśanyūnaṃ⁶⁾ na kārayed iti vacanāt //

§137

tato manasā maṇḍalaṃ devatāṃś ca pratyā(52b)kṣān⁷⁾ ni-
ścitya⁸⁾ / puṣpādibhiḥ sampūjya catuḥpraṇāmādikapūrvakaṃ⁹⁾ /
saṃvaram ādāya yathāvat sarvavajrīm baddhvā¹⁰⁾ praviśet / tato
vajrodakaṃ yathāvat pītṛvātmanam āveśayet / vāmakrodhamuṣṭyā¹¹⁾
dakṣiṇahastasattvavajrīm¹²⁾ adhyamāṅgulīm¹³⁾ punaḥ punaḥ sphoṭayet
/ aḥkāreṇa yathāvad dṛḍhikṛtya tadāveśaṃ yāvat¹⁴⁾ /

vajraṃ tattvena saṃgrhya ghaṇṭāṃ dharmeṇa vādya ca /
samayena mahāmudrām adhiṣṭhāya hṛdayaṃ jayet // 1 //
iti / pūrvoktavidhiṃ kṛtvā vakṣyamānagāthāpañcakenānuijñam
udgatāvyaḥkaraṇaṃ cādāya śrīvajrasattvātmanamantram //

1) Ms. °tānañ

2) Ms. °bhaś

3) Ms. *damaged*, Tib. rañ gi rigs

4) Ms. -catuṣṭhayaṃ

5) Ms. -catuṣṭhayañ

6) Ms. vacanām

7) Ms. *damaged*, Tib. mñon sum lta bur

8) sic., Tib. bsams la; saṃcintya?

9) Ms. -praṇāmādika-

10) Ms. baddhvā

11) Ms. -vajrā-

12) Ms. -madhyamañ°

13) Ms. puna

14) Ms. dṛḍi°

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴—(高橋)

(もし水(?)が)得られない時は吉祥なる金剛薩埵と五如来達の瓶から水
差しにそいで、(金剛)薩埵と(金剛)宝と(金剛)法と(金剛)業の金剛相を
各部のマントラによって百八回唱うべし。四つの瓶と四つの水差しを与う
べし。十より少なからざるべし。とされている。

§137 諸軌則

次に、意にてマンドラと諸天の現前を觀想し、花等によって供養して、
四礼等を始めとする律儀を受持し、如実に一切金剛女(印)を結んで(マン
ダラ)に入るべし。次に、金剛水を如実に飲んで、自身に入らしむべし。
左の忿怒拳によって、右手の薩埵金剛女(印)の中指を繰り返し引き裂くべ
し。アハ字によって如実に堅固になして、その遍入をなし、乃至、

(1)真実の(象徴)として金剛杵を把り、法の(象徴)として鈴を打ち鳴らし、

三昧耶(本誓)の(象徴)として大印を加持し、心真言を誦すべし。

という以前に説いた軌則をなして、(次いで)説かれている五種の讃頌によ
って許可と称讃と授記とを受持し、吉祥なる金剛薩埵そのもののマントラ
をも(受持すべし)。

1) Skt. abhāve が何故この位置にあるか不明。Tib. によれば、daśanyūnaṃ…の
一節の冒頭に來ている。

2) Tib. 訳では共に bum pa と訳されている kalaśa と (pūrṇa)kumbha を瓶と
水差しと訳した。Tib. では (pūrṇa)kumbha を「瓶を満たすこと」としている。
さすれば kalaśāt は kalaśān か。

3) Tib. rdo rje sems ma 「金剛女印」遍入の印。

§138

tataḥ svādhiṣṭhānādikaṃ kṛtvā “suratavajro” ham” ity ādy
 anyataraṃ nāmoccārya vairocana mahāmudrāṃ baddhvā tatsthāne¹⁾
 ②② vajradhātu aḥ // iti / tathāgatavajram ātmānam āveśayed²⁾
 ②③ vajro 'ham // tato ②④ vajradhātur aham // iti / tadvajram³⁾
 bhāvayet / evaṃ yāvad vajrāveśamahāmudrāṃ baddhvā tatsthāne¹⁾
 ②⑤ vajrāveśa aḥ // iti / vajraghaṇṭām ātmānam āveśayet / ②⑥⁴⁾
 vajraghaṇṭāham // tato ②⑦ vajrāveśo 'ham // iti tadghaṇṭām
 bhāvayed evaṃ vajreṇa sādhitam bhavati /

§139

sattvavajrāṃkuṣīm baddhvā¹⁾ vajrācāryas tataḥ punaḥ /⁵⁾
 kurvaṇ⁷⁾ acchaṭāsamghātaṃ sarvabuddhān samājayet // 1 //⁸⁾
 ②⑧ om vajrasamāja jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ //
 pravartayan /⁹⁾
 tataḥ śighraṃ¹⁰⁾ mahāmudrāṃ vajrasattvasya sevayan /¹¹⁾
 uccārayet sakṛdvāraṃ nāmāṣṭaśatam uttamam // 2 //

§140

tathaiva vajrāṅkuśādibhiḥ ākr̥ṣya praveśyabaddhāvaśīkṛtya
 vajrayakṣeṇa vighṇotsāraṇaṃ prākāraṃ pañjaraṃ kṛtvā samaya-

1) Ms. badhvā

2) sic.

3) Ms. tanvajrām

4) Ms. vajrā-

5) Ms. vajam cā°

6) Ms. °yās

7) Ms. °vant

8) Ms. acchaṭāsampātām

9) Ms. pravarttayam

10) Ms. śrighram

11) Ms. sevayam

§138 啓 請

次に自加持等をなして、「吾れは妙楽金剛なり」云々等、何れかの(灌頂)名を発して、毘盧遮那の大印を結び、その座位で ②② 「金剛界よ アハ」と(唱え)、如来の金剛(杵)に自身を遍入さすべし。②③ 「吾れは金剛(杵)なり」次に、②④ 「吾れは金剛界(如来)なり」と(唱え)、その金剛(杵)を觀想すべし。かくの如く乃至、金剛遍入(金剛鈴菩薩)の大印を結び、その座位において ②⑤ 「金剛遍入よ アハ」と(唱え)、金剛鈴に自身を遍入さすべし。②⑥ 「吾れは金剛鈴なり」次に ②⑦ 「吾れは金剛遍入(菩薩)なり」と(唱え)、その鈴を觀想すべし。かくの如くならば金剛(某甲)として成就す。²⁾

§139 觀仏海会

(1)次に再び、金剛阿闍梨は薩埵金剛鉤(の印)を結んで、彈指をなして一切諸仏を召集すべし。

②⑧ オーン 金剛集会よ ジャハ フーン ヴェン ホーホ

(と)転じつつ、

(2)次いで、速やかに大印を金剛薩埵に獻げつつ、最上の百八名讃を一度唱うべし。

§140 阿闍梨の所作

同様に、金剛鉤等の(印)によって、鉤召と引入と縛と自在をなして、金剛藥叉の(印言)によって障礙の破壊と牆と網をなして、

1) Tattvālokaḥ (P. 132a⁴); 「如来の金剛(杵)を自身と想い。その金剛(杵)を『吾れは金剛なり』と觀想して…」

2) まず「金剛界よ アハ」といって毘盧遮那の心真言を唱え、毘盧遮那の象徴である金剛杵を自身に入らしめ「吾れは金剛杵」なりと唱え、「吾れは金剛界(如来)なり」と自覚し、その象徴たる金剛杵を觀想するのである。以下三十七尊を順次に修し、鈴菩薩に至る。

vajramuṣṭinā maṇḍaladvārāṇi baddhvā¹⁾ dvyakṣarakavacena sar-
varakṣāḥ saṃrakṣyārghadānapūrvikābhiḥ²⁾ svasamayamudrābhir
dṛśyaṃ³⁾ kṛtvā

②⑦ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ // pravartayan /

samayas tvam // samayas tvam aham //

ita ca / svahrdayāni mantrāṃś cānte saṃsādhya⁴⁾ / dharmakarma-
mahāmudrābhiś cāmudryābhiṣīced⁵⁾ mudrābhiṣekais tathāgatādin
bhadrakalpikaparyantān⁶⁾ // tatra sattvavajrādīnāṃ svahrdayāny
eva dharmamudrāḥ⁷⁾ / vajrasattvaratnadharmakarmāṇāṃ⁸⁾ karma-
mudrāmahāmudrāś⁹⁾ ca / vajrādyantargatāḥ¹⁰⁾ strirūpadhāriṇyo vajra-
sattvādirūpās ca tā iti //

“vāmatathāgatamuṣṭim¹¹⁾ uttānaṃ kṛtvā dakṣiṇahastatarjany-
aṅguṣṭhābhyāṃ kaniyasīm ā(53b)rabhya vikāśya saṃputā-
ñjalīm kuryāt” /

iyaṃ¹²⁾ maitreyādīnāṃ samayamudrā vidyā caiṣāṃ pūrvoktā / tān¹³⁾
eva vidyāṃ¹⁴⁾ teṣāṃ¹⁵⁾ jihvāsu nyased iyaṃ teṣāṃ dharmamudrā //

1) Ms. vadhvā

2) Ms. try-

3) Ms. dṛśyā

4) Tib. yarṇ dag par bskul la (saṃcodya?)

5) Ms. cāmudrābhi°

6) Ms. °tām

7) Ms. °satvā /

8) Ms. °karmanām /

9) Ms. °mahāyamudrāś

10) Ms. °antaryantā /

11) Ms. °muṣṭimudrā ttā°

12) Ms. iyā

13) Ms. nām

14) Ms. °dyān

15) Ms. nyasyed

三昧耶金剛拳をもってマンダラの諸門を縛し、二文字 (om ṭum) の甲
背によって一切の守護を守護し、閼伽水の施与(等)¹⁾以前になした各自の三
昧耶印をもって(マンダラ)を見て、

②⑦ ジャハ フーン ヴァン ホーホ 【と転じつつ】 汝は三昧耶なり

吾れと汝は三昧耶(平等)なり

とまた(唱うべし)。各自の心真言とマントラを最後に成就し、法(印)と羯
磨(印)と大印とによって刻印し、印灌頂によって、如来を始めとし、賢劫
の辺際にいたるまで灌頂すべし。

そのうち薩埵金剛(女)等の各自の心真言こそ法印である。金剛薩埵、
(金剛)宝、(金剛)法、(金剛)業の羯磨印と大印は、金剛(杵)等の中にあり、
妃の色身を持し、またそれらは金剛薩埵等の色身を有す。

「左の如来拳を上向きになし、右手の頭指と大指の二本によって小指か
ら始めて開いて、虚心合掌をなすべし」。

これは弥勒等の三昧耶印であり、それらの明(呪)は以前に説いた。それ
らのその明(呪)を舌に置くべし。その(明呪)が彼らの法印である。

1) いわゆる大印成就法広大儀則、拙稿「第一瑜伽三摩地品」§39 以下

2) 拙稿「第一瑜伽三摩地品」§45, §46

3) Tib. 訳の gñis kyi は gñis kyis と instr. に読むべきであろう。

aḥkāreṇa svahr̥dī viśvavajraṃ niṣpādyā teṣāṃ lekhyānusārato
mahāmudrā¹⁾ baddhvā karmamudrā bhavanti / svahr̥dī pañcasū-
cikaṃ vajraṃ²⁾ vicintya³⁾ lekhyānusārata eva teṣāṃ mahāmudrā⁴⁾
bandhanīyāḥ / saivaṃ ca vidyā sāmānyeti //

§141

tataḥ pūjāṃ⁵⁾ kuryād arghaṃ dattvā / vastrayugalakṣaṃ daśa-
sahasraṃ sahasraṃ śataṃ⁶⁾ pratyekaikaṃ vā sarvasāmānyam /
nānāprakārāṇi vitānāni catuḥkone⁷⁾ vicitrapatākāvasaktāni / chatt-
rapatākāś⁸⁾ ca oṃkāreṇa vajrasattvena ca saptam⁹⁾ abhimantrya /
puṣpavṛkṣaśataṃ¹⁰⁾ caturo vā vṛkṣāṇ¹¹⁾ sarvapūṣpāṇi ca pūrvavad
abhimantrya /

②⑧ oṃ vajrasphara khaṃ //

iti niryātayet //

sarvagandhān savāsāṃś¹²⁾ ca vilepaṇasugandhikān¹³⁾ gandhavid-
yayā / karpūrāgaruturuṣkāṇi¹⁴⁾ candanādīsaṃmīśrāni¹⁵⁾ dhūpavidya-
yābhimantrya / dhūpaghaṭikākṣaṃ daśasahasraṃ sahasraṃ śat-
aṃ vā daśanyūnaṃ na kāryam /

1) Ms. °mudrām

2) Ms. vajrām

3) Ms. vicintya

4) Ms. samā°

5) Ms. pūjyā

6) Ms. śata /

7) Ms. °kona

8) Ms. cchatra-

9) Ms. saptaso

10) Ms. °tryaṃ

11) Ms. vṛkṣā-

12) Ms. savāsāṇ, Tib. dri shim pa (sugandhasuvāsa ?)

13) Ms. °dhikam /

14) Ms. -turaṣkāni

15) Ms. -samiśrāni

アハ字より自身の心臓に毘首金剛(杵)を置き、それら(弥勒等の千仏の)
画像に依拠して大印を結び羯磨印を成ず。自身の心臓に五峯金剛(杵)を想
い、画像に依拠してそれら(千仏)の大印を結ぶべし。またそのようにその
明(呪)も共通に(唱うべし)。

§141. 諸供養

次に、供養をなすべし。閼伽水を捧げ、一對の衣服を十万、一万、千、
百、或は各自に一つをすべて共通に(捧ぐべし)。

四隅において、様々な種類の幔や、種々なる幡を懸けるべし。また、傘
蓋や幡をオーン字によって、また、金剛薩埵の(真言)によって、七度び加
持して(かかげるべし)。

花や樹を百、或は四本の樹を、また一切の花を前の如く加持して、

②⑧ オーン 金剛拡散よ カン

と(唱え)献出すべし。

良き香りの一切の薫香と塗香の良き香りのものを塗香の明(呪)にて(加
持し、捧げるべし)。樟脳、アガル、乳香を、センダン等を混ぜ合わせた
ものを焼香の明(呪)にて加持し(捧げるべし)。香爐を十万、一万、千、或
は百(捧げるべし)。(その際)十よりは少なくはなさるべきでない。

ghṛtapradīpādīlakṣādisaṃkhyāṃ pradīpakunḍasahasraṃ (54a)
śataṃ daśakunḍāni catvāri vā / pūrvavat pradīpamantrenābhi-
mantrīya /

svastikam āditaḥ kṛtvā balyupahāraṃ lakṣarūpakam daśasa-
hasraṃ śataṃ daśasaṃkhyāṃ vā nānāprakārāṇi ca bhakṣyāni
pūrvavad eva / ②⑨ akāro mukham // ityādinā sarvadevatābhyāṃ
niryātaḥ /

daśavādyasahasraṇi daśavādyākāreṇa vādyamudrābhīṃ vajra-
muṣṭībhyāṃ karāṅgulibhīṃ vādyābhīṃ / daśaparakāḥ tadyathā
vīṇāvaṇśamurajamukundakāṃsibherīmṛdaṅgapataḥaguṇjatilā-
bhīṃ /

vādyanaṭanartakamakuṭakatakakunḍalādīpūjāś ca / omkāreṇa
hūṃkāreṇa vābhimantrīya nīpātayet /

tathā paṭāvalambanā kāryā srak cāmaravibhūṣitā / hārārdha-
hārāracitārdhacandropasobhitā /

turagāhastigoyūthā dātavyāś ca sukalpitāḥ /

toraṇāni ca ramyāni ghaṇṭādisahitāni ca // 1 //

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴一(高橋)

酥燈等の十万を始めとする(一万、千、百の)数を、燭器を千、百、十、
或は四を以前の如く灯火のマントラにて加持して(捧げるべし)。

初めに卍(菓子)を供え、献供を十万種、或は一万、百、十ほど、また、
様々な種類の食物を以前の如く ②⑨ 「ア字は門なり」云々等の(マントラ
を唱え)、一切の諸天に献出すべし。

一万の楽器を十種の楽器をもって、楽器の印、(すなわち)(二手)金剛拳
になし、手指によって楽器を(打つが如き)仕種を(なして捧ぐべし)。十種
の(楽器)とばすなわち、琵琶、簫、太鼓、小太鼓、鉦、大太鼓、腰鼓、連
鼓、グンジャ、ティミラーの仕種である。

また、楽器と舞と踊と宝冠と釧と耳飾等の供養をオン字によって、或
はフーン字によって加持して献出すべし。

同様にパールを懸けた花環を作るべし。その(花環)は仏子で飾られ、嬰
珞や半嬰珞で飾られ、半月にて荘嚴されている。

(1)また、馬や象や牛の群達を捧げると想うべし。

また、鈴等をつけた心地よい塔門を(捧げるべし)。

1) Ms. °ābhiḥ

2) Ms. kāra°

3) Ms. °nayo daśa°

4) Ms. °pūjyāś

5) Ms. srajdāmara-

tato vajralāsyādibhiḥ sampūjya / “sarvasattvārtham¹⁾ kuru-
dhvaṃ sarvasiddhaye”²⁾ iti / sarvatathāgatavijñaptiṃ kuryāt //

§142

tato bāhyabalim dadyād uttarasādhakam maṇḍale pratiṣṭhā-
pya /

salājam satilaṃ sām̐bhaḥ sabhaktam kusumais saha³⁾ /
śaṣkulikādibhakṣaiḥ (54b) c⁴⁾ ㊸ ākārādinaḥ parijapya // 1 //
pūrvadigbhāgam ārabhya tṛkṣepāt / gandhapuṣpadhūpadipārgham⁵⁾
cādāv⁶⁾ ante ca dadyāt /

tatra pūrvam tāvan maṇḍalakāni kārayet / tata⁷⁾ āvāhayet /
tataḥ samayaṃ darśayet / argham ca dattvā gandhādibhiḥ sam-
pūjya balim dadyāt / tato visarjayed⁸⁾ iti / tatreme mudrāmantrā
bhavanti /

[Śakra] āliḍhapadena sthitaḥ⁹⁾ prāṇmukho vāmavajram¹⁰⁾ darśa-
yet / dakṣiṇavajram¹¹⁾ kaṭideśe¹²⁾ samdhārya dakṣiṇatarjanyaṅkuśyā-
vāhayet / tarjanyaṅkuśarahitā śakrasya samayamudrā / pratyā-
liḍhapadena sthitvā / āvāhanamudrāyās tarjanim prasārya visar-
janamudrā / athāsya¹³⁾ mantrāḥ¹⁴⁾ /

- 1) Ms. °rtha
2) Ms. sarvatagathāga-
3) Ms. sahaḥ
4) Ms. damaged, DP, Sk. p. 272, l. 21
5) Ms. -dirghā-
6) Ms. ścādāv arnte
7) Ms. tataḥ
8) Ms. ibhiḥ
9) Ms. °tam /
10) Ms. -vājran
11) Ms. °dese
12) Ms. sadhā(r)ya
13) Ms. athāsam
14) Ms. °tram

次いで金剛嬉等(八供養菩薩の印明)によって供養し、『一切の悉地のた
めに、一切有情の利益をなしたまえ』と、一切如来に請願すべし。

§142 諸天供 (十方諸天の印言)

次に、外的な供物を捧ぐべし、助手をマンドラに安住せしめ、

(1)煎り米、胡麻、水、飯を花と和して、ジャシュクリカ等の食物と共に、

㊸「ア字は」云々という(真言)によって誦して

東方の部分より始めて(四方に)三度散すべし。また、塗香、花、焼香、燈
明、闍伽水を始終捧ぐべし。

そこで先づ始めに、マンドラを作壇すべし。次いで、(諸天)を勧請すべ
し。次に三昧耶(印)を示すべし。また闍伽水を捧げ、香等によって供養し、
施物を捧ぐべし。(最後)に奉送すべし。以上、その時のそれら(諸天)の印
とマントラは(次の如く)である。

[帝釈天] 展右の姿勢にて東方に顔を向け、左の金剛(拳)を顕示すべし。
右の金剛(拳)を腰に置き、右の頭指を鉤になして召請すべし。頭指を鉤に
なさざる(印)が帝釈の三昧耶印である。展左の姿勢をなして、召請の印よ
り頭指を展べれば奉送の印である。そこで、そのマントラは(以下の如し)。

1) śaṣkulikā, D.sren chen, P.N. sren chañ. ケーキの一種、クッキー。

②③ namo vajrasya¹⁾ diśi diśi vajrapāṇe rakṣa rakṣa svāhā //
[Agni] dakṣiṇakaratarjanī kuṇḍalākāreṇa kuñcayitvā madhya-
masūcyās tṛtiyaparve dhārayed aṅguṣṭhaṃ²⁾ ca karamadhye /
agner āvāhanamudrā / āvāhanamudrāyā aṅguṣṭhatarjanīpārśvās-
ritam³⁾ agner⁴⁾ samayamudrā / asyā eva mudrāyāḥ⁵⁾ karamadhye /
abhimukhāv aṅguṣṭhatarjanīnakhāv ekato⁶⁾ yojyau visarjanamudrā⁷⁾
/ mantraḥ /

②④ agne ehy ākapilākapila jvala 2 daha (55a) śikhitoli⁸⁾
virūpākṣa svāhā //
[Yama] yāmyābhimukho⁹⁾ yogy¹⁰⁾ abhimukhau karau kṛtvābhyanta-
ravajrabandhaṃ madhye aṅguṣṭhayugalaṃ¹¹⁾ bahir anāmikādvayā-
saktasūciṃ punar abhyantaram¹²⁾ dhārayed yamasyāvāhanamudrā /
anāmikāṃ¹³⁾ punar bāhyataḥ¹⁴⁾ sūciṃ tathaiva kṛtvā mudrāṃ hṛdaye
dhārayet samayamudrā / anayaivānāmikāsūcyā visarjanaṃ bha-
vati⁷⁾ / mantraḥ /

②⑤ yamāya svāhā //
[Nairṛti] nairṛtyabhimukhas samapādasthito dakṣiṇakaramuṣṭim¹⁵⁾
kṛtvā madhyamātarjanyau kuñcayet / khadgākāreṇa¹⁶⁾ samsthāpya
vāmakaram kaṭipradeśe dhārayed vāmatarjanīm kuñcayitvā nair-
ṛter āvāhanamudrā /

- 1) Ms. adds ca
- 2) Ms. °mudrayā
- 3) Ms. °āsṛtam
- 4) Ms. agne
- 5) Ms. mudrayāḥ
- 6) Ms. yojyo
- 7) Ms. mantra /
- 8) Ms. śikhin oli (?)

- 9) Ms. yogi
- 10) Ms. kṛtvā abhi°
- 11) Ms. abhyāntara
- 12) Ms. punā
- 13) Ms. sūci
- 14) Ms. hṛdaye
- 15) Ms. khadgākāreṇa
- 16) Ms. niṛter

②③ 金剛に帰命す 処々において 金剛手よ 守護し給え 守護し給え
スヴァーハー

[火天] 右手の頭指を環の形に曲げ、針の如き中指の第三節に着けるべし。
また大指を掌の中央に(着けるべし)。火(天)の召請印である。召請の印より
大指を頭指の脇に着けるは火(天)の三昧耶印である。まさにその印より
掌の中央において、大指と頭指の爪を合わせて一つになすは奉送の印であ
る。マントラは(以下の如し)

②④ 火(天)よ 来たれ 赤色を帯びたるものよ 赤色を帯びたるものよ
燃えよ 燃えよ 焼き尽せ (火)頂よ¹⁾ 醜眼なるものよ スヴァー
ハー

[ヤマ天] 瑜伽者は南方に向かい両手を合わせ、金剛内縛を(なし)、中に
おいて大指を着け、外に二無名指を着けて針になし、再び内に持すべし。
ヤマ(天)の召請の印である。無名指を再び外にして(前と)同じく針の(如
くになし)、(その)印を心臓に置くべし。三昧耶印である。まさにその針
の如き無名指にて奉送をなす。マントラは(次の如し)

②⑤ ヤマ(天)のために スヴァーハー

[涅槃底天] 南西に向かい足を平らに住し、右手拳になし、中指と頭指を
曲げるべし。剣の形にして留め、左手を腰に置くべし。左の頭指を曲げれ
ば涅槃底(天)の召請の印である。

1) 不明。DP. Sk. p. 274, l. 14 には śikhito lola とあるもなお不明。

asyā eva mudrāyā¹⁾ vāmakaram kaṭideśe²⁾ 'vasthitam khaḍga-
mudrā nairṛteḥ³⁾ samayamudrā / āvāhanamudrāyās⁴⁾ tarjanīm pra-
sārya visarjanamudrā / mantraḥ⁵⁾ /

②⑤ sarvabhūtabhayamkara kuru 2 svāhā //

[Varuṇa] vāruṇyām⁶⁾ diśi⁷⁾ samapādāvasthito dakṣiṇakaratarjany-
aṅguṣṭhāv⁸⁾ ekato yojayet / vāmamuṣṭīm⁹⁾ hrdaye samdhārya vā-
matarjanyaṅksenāvāhayet¹⁰⁾ / varuṇasyāvāhanamudrā / asyā eva
vāmatarjanīm muṣṭiyogato dhārayet pāśamudrā (55b) varuṇasya
samayamudrā / āvāhanamudrāyās¹¹⁾ tarjanīm prasārya visarjana-
mudrā / mantraḥ⁵⁾ /

②⑦ tṛ tṛ puṭa tṛ tṛ śikhitolī¹¹⁾ virūpākṣa svāhā //

[Vāyu] vāyavyām¹²⁾ diśy¹³⁾ abhimukhaṁ sthitvā vāmamadhyamām
sūcīm¹³⁾ muktā tarjanī kuṇḍalākāreṇa¹⁴⁾ tṛtiyaparve samdadhyād
abhimukhaṁ prasāryet / dakṣiṇakaram kaṭideśe samsthāpyā-
kuñcitāṅguṣṭhena vāyor āvāhanamudrā / asyā evaṅguṣṭhapūr-
vavad vāyoḥ samayamudrā / āvāhanamudrāyās¹⁴⁾ aṅguṣṭhaṁ pra-
sārya visarjanamudrā / mantraḥ⁵⁾ /

②⑧ om śvasa khākha khākha svāhā¹⁵⁾ //

1) Ms. mudrayā

2) Ms. -dese

3) Ms. nirṛteḥ

4) Ms. avāhana-

5) Ms. mantra /

6) Ms. vāraṇyan

7) Ms. sampadā°

8) Ms. *inserts two obscure letters between yo and ja*,

9) Ms. °āvāyet

10) Ms. °mudrayās

11) Ms. śakhitolī (?)

12) Ms. diśv

13) Ms. sūcīm

14) Ms. °mudrayā

15) Ms. °khaḥ

まさにその印より左手を腰に置く。剣印なり。涅槃底(天)の三昧耶印で
ある。召請の印より頭指を展べれば奉送の印である。マントラは(以下の
如し)。

②⑥ 一切の鬼神を恐れさすものよ なせ なせ スヴァーハー

〔水天〕 西方に(向かい)、足を平らに坐し、右手の頭指と大指を一つに結
ぶべし。左の拳を心臓に置き、左の頭指を鉤にして召請すべし。水(天)の
召請の印である。まさにその印より左の頭指を拳の仕方を持すべし。索の
印であり、水(天)の三昧耶印である。召請の印より頭指を展べれば奉送の
印である。マントラは(以下の如し)。

②⑦ トリ トリ プタ トリ トリ シッキトリー¹⁾ 醜眼なるものよ
スヴァーハー

〔風天〕 西北方に向かって坐し、左の中指を針に(なし)、頭指を解いて環
になし、(中指の)第三節につけ、前方に展ばすべし。右手を腰に置き、大
指を曲げれば風(天)の召請印である。まさにその(印)より、大指を以前の
如く(なすは)風(天)の三昧耶印である。召請の印より大指を展べれば奉送
の印である。マントラは(以下の如し)。

②⑧ オーン 風よ カーカ カーカ スヴァーハー

1) 不明。前頁注 1) 参照。

[Kuvera] kauveryabhimukhasthitaḥ karadvaya¹⁾m abhimukhaṁ
kṛtvābhyantaravajrabandhaṁ kaniṣṭhādvayasūcīm tasyāḥ pṛṣṭha-
to 'nāmikāyugalaṁ pṛthak pṛthak saṁdhārya madhyamāṁ sū-
cīm vajrākāreṇa nāmayet kuverāvāhanamudrā / asyā eva mu-
drāyā²⁾ madhyādvayaṁ abhyantaravajrabandhayogato nyasyet ku-
verasya samayamudrā / āvāhanamudrāyā³⁾ madhyādvayaṁ prasārya
visarjanamudrā / mantraḥ /

②③ om kuverāya svāhā //

[Īśāna] aiśānyāṁ⁴⁾ diśi tad abhimukhāvasthitaḥ karadvaya(56a)m
ekato yojyāñjalīm kṛtvā kanyasānāmikais talavajrabandhaṁ
kṛtvāṅguṣṭhayugalaṁ madhyāśritaṁ madhyamasūcyo bahir vajrā-
kāreṇa tarjanīdvayaṁ nyasya tad evākuṁcyopari parasparana-
khāsaktaṁ kuryād īśānāvāhanamudrā / asyā eva tarjanyau pūr-
vavajrākāreṇa dhārayed īśānasya samayamudrā / āvāhanamudrā-
yās tarjanyau prasārya visarjanamudrā / mantraḥ /

②④ om juṁ juṁ śiva svāhā //

[Ūrdhva] pratyāliḍhasthānastho⁸⁾ 'ñjalyākāreṇa hastau saṁdhār-
yordhvaṁ⁹⁾ dṛṣṭvā tarjanīdvayāñkuśyā brahmādinām āvāhanam /
asyā eva tarjanīdvayaṁ¹⁰⁾ pūrvavat saṁsthāpya samayamudrā /

1) Ms. °cīn

2) Ms. mudrayā

3) Ms. °mudrayā

4) Ms. aiśānyan

5) Ms. asyām

6) Ms. °nyo

7) Tib. sña ma bshin du, pūrvavad (cf. DP.Sk. p.276. l.25)

8) Ms. hasto

9) Ms. °orddha-

10) Ms. °dvaya-

[增長天] 北方に向かって坐し、二手面を合わせ、金剛内縛を(結び)、二
小指を針の(如くになし)、その背に一對の無名指をそれぞれ置いて、中指
を針の(如くになし)、金剛(杵)の形の(如く)屈すべし。クペーラ(天)の召
請印である。まさにその印のままで、二中指を金剛内縛の仕方でも置くべし。
クペーラ(天)の三昧耶印である。召請の印より二中指を展べれば奉送の印
である。マントラは(以下の如し)。

②⑤ オーン クペーラのために スヴァーハー

[伊舎那天] 次は、北東の方に向かって坐し、二手を一つに合わせ、合掌
し、小指と無名指をもって平らに金剛縛になし、一對の大指を中指に著け、
中指を針の(如くになし)、外から金剛(杵)の形の(如く)二頭指を置いて、
まさに曲げ、さらに双方の爪を著けるべし。伊舎那(天)の召請印である。
まさにその(印)より二頭指をもとの(如く)金剛(杵)の形に持すべし。伊舎
那(天)の三昧耶印である。召請の印より二頭指を展べれば奉送の印である。
マントラは(以下の如し)。

②⑥ オーン ジュン ジュン シバよ スヴァーハー

[上天] 展左の姿勢で坐し、合掌の形で両手を置いて、上方を見て二頭指
を鉤になせば梵天達の召請(印)である。まさにその印より二頭指をもとの
如くに置けば三昧耶印である。

āvahanamudrāyās tarjanīdvayaṃ prasārya visarjanamudrā / man-
trā bhavanti /

②① ūrdhva¹⁾brahmane svāhā / sūryāya grahādhipataye svāhā /
candrāya nakṣatrādhipataye svāhā //
[Adhas] samapāda²⁾m sthānam āsthāya hastadvayaṃ ekato yojya
viralānyonyāṅgulyagraṃ saṃyojyāṅguṣṭhau vartulākāreṇādhodṛṣ-
ṭiṃ kṛtvā pṛthivyādīnāṃ tarjanyaṅkuśābhyām āvahanam / tar-
janya³⁾u pūrvavad vyavasthāpya samayamudrā / āvahanamudrā-
yāḥ prasāritatarjanibhyām (56b) visarjanam / mantraḥ⁴⁾ /

②② adhas⁵⁾pṛthivyai svāhā / asurebhyāḥ svāhā /
nāgebhyāḥ svāhā //
iti⁶⁾ // tata⁷⁾ ācamanaṃ svamantrair eva sarveṣāṃ dattvā “sa-
śiṣyagaṇasya mamāvighnān kuruta karmasiddhiṃ ca me prayac-
chate” ty uktvā sarvān visarjayed iti // //

§143

atha subāhuparipaṭhitagāthābhir balim dadyāt /
devāsuraḥ sarvabhujamgasiddhāś
tārksyāḥ⁸⁾ suparṇāḥ kaṭapūtanāś ca /

- 1) Ms. ūrdha-
2) Ms. °padam
3) Ms. °nyonyāṅgulyagra-
4) Ms. cartulā-
5) Ms. mantraḥ
6) Ms. adha pṛ°
7) Ms. tataḥ
8) Ms. tā(r)kṣāḥ

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴一(高橋)

召請の印より二頭指を展べれば奉送の印である。諸々のマンドラがある。

②① 上方の梵(天)に スヴァーハー 遊星の主たる日(天)に スヴァ
ーハー 宿星の主たる月(天)に スヴァーハー

[下天] 足を平らにして坐し、両手を一つになして、まばらなお互いの指
の先端を著けて、二大指を環になして、下方を見て、二頭指の鉤によって
召請するは地(天)等の(召請印である)。二頭指をもとの如く置けば三昧耶
印である。召請の印より二頭指を展べれば奉送(の印)である。諸々のマン
トラは(以下の如し)。

②② 下方の地(天)に スヴァーハー 非天(達)に スヴァーハー
龍達(達)に スヴァーハー

以上。次いで、(阿闍梨は)各々の真言と共に、一切の(諸天)に洒水をなし
て、「(汝らは)弟子の集団を共なえる吾れに障碍をなすなかれ、そして吾
れに羯磨の悉地を授けたまえ」と言って、一切の(諸天を)奉送すべし。

§143 妙臂菩薩請問偈

次に妙臂(菩薩)によって説誦された偈頌とともに供物を捧ぐべし。

(1)天、非天、一切の龍成就者、タールクシュヤ鳥、はげたか、カタブ
タナ、

gandharvā¹⁾ yakṣā grahajātayaś ca
 ye kecīd²⁾ bhūmau nivasanti divyāḥ // 1 //
 nyastaikajānuḥ prthivitale 'haṁ
 kṛtāñjalir³⁾ vijñāpayāmi⁴⁾ tāms⁵⁾ tu /
 saputradāraiḥ saha bhrtyasaṁghaiḥ
 śrutvā ihāyāntu anugrahārtham // 2 //
 ye meruprṣṭhe nivasanti bhūtā
 ye nandane ye ca surālayeṣu /
 ye codayāste ravimandare ca
 nagareṣu sarveṣu ca ye vasanti // 3 //
 saritsu sarvāsu ca saṁgameṣu
 ratnālaye cāpi kṛtādhivāsāḥ /
 vāpitaḍāgeṣu⁶⁾ ca palvaleṣu
 kūpeṣu⁷⁾ vaporeṣu ca nirjhareṣu // 4 //
 ye grāmaghoṣe surakānane vā
 śūnyālaye devagrheṣu ye ca /
 viharacaityāvasathāśrameṣu
 maṭheṣu śālāsu ca kuñjarāṇām // 5 //
 ye bhūbhṛtām citragrhe vasanti
 rathyāsu vithiṣu ca catvareṣu /
 ye caikavṛkṣe[ṣu mahāpatheṣu
 mahāśmasāneṣu mahāvaneṣu // 6 //]

1) Ms. °vaṁ

2) Ms. kecī

3) Ms. °jali

4) Ms. vijñā°

5) Ms. tāś

6) Ms. omits ca, DP. Sk. p. 280, l. 6

7) Ms. vadheṣu. Tib. g'yaḥ chu

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現—余滴—(高橋)

- ガンダルバ、ヤクシャ、鬼魅の一族、地に住まいする上妙なる者達
 (2)彼らに吾れは地上にひざまづき合掌し乞いたてまつる。
 妻子を共ない、眷属の群と共に、聞き届け、いまここに摂取のために
 米たりたまえ。
 (3)須弥山の背に住まいするブータ達、歓喜園、天住処、(日が)昇り没す
 る処、日のマンダラ山¹⁾、あらゆる町に住まいする者達
 (4)河、一切の合流点、宝処に住まいする者達、池、湖、水溜まり、ほら
 穴、塚、瀧(に住まいする者達)
 (5)村落、神の森、空屋、天祠、僧院、制底、宿処、隠遁処、小房、象舎
 (に住まいする者達)
 (6)王侯達の飾り部屋に住まいする者達、街道、巷、十字路、また、一樹、
 [大道、大寒林、大森林(に住まいする者達)]<以下欠>

1) 不明, Tib. は日月の家, mandara は maṇḍala か。

当儀軌の概略

当軌はそのコロホーンによれば『聖一切如来真実撰大乘現証大儀軌より略出せる金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現と名づくもの』(dpal de bshin gśegs pa thams cad kyi de kho na ñid bsdus pa / theg pa chen po mñon par rtogs pañi rgyud chen po las *btus pa* / rdo rje dbyiñs kyi dkyil ñkhor chen poñi cho ga rdo rje thams cad ñbyuñ ba shes bya ba //, ŚrīmadĀryasarvatathāgatatattvasaṃgrahād Mahayānābhisamayād Mahātantrarājād *uddhṛto* VajradhātumahāmaṇḍalopāyikaSarvavajrodayo nāma)とあり、金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』と同じく、金剛頂經(『真実撰經』)より略出(*btus pa*, *uddhṛta*-)したものであるという。チベット訳はインドの学匠 Ācārya-Buddhaśrīśānti(?) とチベットの大翻訳官リンチェンサンポ(Rin chen bzañ po A.D. 958~1055)の手になるものである。梵文写本はその奥付に *samvat acūte* (サンバット 179年 A.D. 1059年)とあり、リンチェンサンポが翻訳した年代より多少後に書写されたものである。現在半分程残る梵文写本はチベット訳とは極くわずかな相異が見られるが、ほとんど一致すると見てよい。以下内容について略述す。

当軌はその帰敬と結頌を除くと大要九項目に分けることが出来る、本文の指示に従えば次の如くである。

- I 第一瑜伽三摩地 (dañ poñi sbyor ba shes bya bañi tiñ ñe ñdsin, ādiyogo nāma samādhiḥ) (§2~§67, P2a²~20a¹)
- II 最勝曼荼羅王三摩地 (dkyil ñkhor rgyal mchog gi tiñ ñe ñdsin, maṇḍalarājāgrī nāma samādhiḥ) (§68~§73, P20a¹~23a⁵)
- III 最勝羯磨王三摩地 (las kyi rgyal mchog ces bya bañi tiñ ñe ñdsin, karmarājāgrī nāma samādhiḥ) (§74~75, P23a⁵~24a²)
- IV 親近の儀軌 (sñon du bsñen pañi cho ga, pūrvasevāvidhiḥ(?))

(§76~§88, P24a²~27a⁵)

- V 淨地護念の儀軌 (sa sbyañ ba dañ yoñs su bzuñ bañi cho ga, bhūmisamśodhanaparigrahaḥvidhiḥ) (§89~§90, P27a⁵~27b⁶)
- VI 薰習の護摩儀軌 (lhag par gnas pañi sbyin sreg gi cho ga, adhi-vāsanahomavidhiḥ) (§91~§100, P27b⁶~29b⁴)
- VII (入壇) 許可の儀軌 (bsgo ba lhag par gnas pañi cho ga, adhi-vāsanavidhiḥ) (§101~§108, P29b⁴~31b³)
- VIII 曼荼羅作壇 (§109~§143, P31b³~48b⁵)
- K 入壇灌頂作法 (§144~§170, P48b⁵~57b⁵)

この内、VIIIとKには明確な表題はないが内容よりここで二つに分けるのが適切であろうかと考える。

Iの第一瑜伽三摩地は五相成身觀を卓尾に舌や手掌加持(三金觀)等の諸加持、二十種供養(『略出念誦經』では十七雜供養)、四礼、懺悔・隨喜・勸請、回向、菩提心戒、召罪、摧罪を始め、大・三・法・羯の四種印智の印と真言を詳説している。これは順序次第が多少前後しているが、我々の『金剛界念誦次第』に相当するものである。

IIの最勝曼荼羅王三摩地は十六大菩薩、四波羅蜜、八供養、四摂の出生段であるが、金剛薩埵の出生段のみ詳説し、金剛王以下の諸菩薩はその誓願(三昧耶)を表わすウダーナのみを挙げる。巧みな省略と云うべきであろう。

IIIの最勝羯磨王三摩地は世尊ビルシャナがアカニシュタ天で現等覺したものの(金剛界曼荼羅)がスメール山上の金剛摩尼宝峯樓閣(vajramañiratnaśikharakūṭāgāra)に化作され集会したもので諸尊の功徳事業を明かす。

以上のI~IIIまでの三摩地は三種三摩地と称される。アーナンダガルバはその注釈書『真性作明』(Tattvāloka-kārī P No. 3333)において、

「かくの如く三(種)三摩地を示して、毘盧遮那と大毘盧遮那を得る方便を示した。そこで次に曼荼羅に入って灌頂の方便に入るべきである云々」(115b⁸~116a¹)

と述べており、また、因縁経 (greṇ gshihi mdo, nidānasūtra) であると説く (2b¹, 52a⁵)。すなわち、毘盧遮那如来が現等覚し、曼荼羅を化作した因縁をもって瑜伽者はこの三種三摩地を修すのである。

『Vajraśikharamahāguhyayogatantra』(P No.113) には

「(第一瑜伽) 三摩地に瑜伽することなくば曼荼羅は堅固にならないであろう。曼荼羅 (王三摩地) に瑜伽することなくば悉地は生じないであろう。」(192b⁸~193a¹)

とあり、無上なる秘密乗を欲する秘密瑜伽者はこの三種三摩地の行境を獲得すべきことを述べている。三摩地 (samādhi) の語よりしてもまさに瑜伽の世界であり、我々からすれば『金剛界念誦次第』を不断に修法し成就することになるであろう。

Ⅳ 親近の儀軌と表示したが、梵本には表題は欠けている。次節に kṛtvā pūrvasevām とある所から親近 (pūrvasevā) と訳したが前供養とでも言うべきか。羯磨会 (供養会) の印言が説かれる。

Ⅴ 浄地護念の儀軌。択地と浄地を説く。

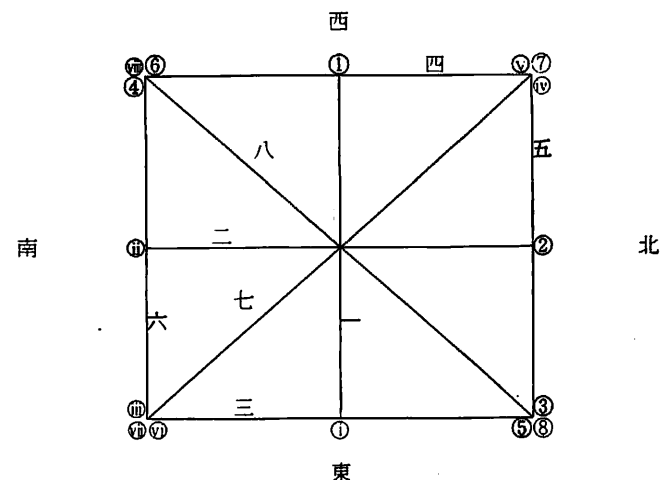
Ⅵ 薫習の護摩儀軌。護摩の作壇を簡潔に説く。護摩修法の前に三種三摩地を修すことをしるす。 (§93) 三種三摩地 (すなわち『金剛界念誦次第』) は不断に修せらるべき前行 (加行) なのである。我が真言密教において、伝法灌頂の際に阿闍梨は灌頂の護摩儀軌を修すことになっているが、それに相当するものと思われる。

Ⅶ (入壇)許可の儀軌と訳したが、発露懺悔、発菩提心、授与齒木、夢想、授与臂釧等を説き、丁度我々の三昧耶戒作法に当たるものである。

Ⅷ 曼荼羅作壇。曼荼羅の具体的な図絵の方法を説く。まず墨打ち法が説かれるが、その記述に従えば次の図の如くなる。 (§112)

阿闍梨の位置をローマ数字の小文字で示し、助手 (uttarasādhaka) の位置を算用数字で示し、漢数字にて線引きの順序をしるす。

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴一 (高橋)



その他、当儀軌の特徴として、賢劫の千仏と賢劫十六尊の名称が総て挙げられていることと、天部の諸天が十方に都合十四天しるされている。現図金剛界曼荼羅最外院の二十天とは異なるものもあり、一つの資料として貴重なものである。方位と尊名をしるせば次の如くである。

1. 東方 帝釈天 (Śakra)
2. 東南方 火天 (Agni)
3. 南方 ヤマ天 (Yama)
4. 南西方 涅槃底天 (Nairṛti)
5. 西方 水天 (Varuṇa)
6. 西北方 風天 (Vāyu)
7. 北方 增長天 (Kuvera)
8. 北東方 伊舍那天 (Īśāna)
9. 上方 梵天 (Brahman)
10. " 日天 (Sūrya)
11. " 月天 (Candra)
12. 下方 地天 (Pṛthivī)
13. " アスラ (Asura)

14. “ 龍(Nāga)

K 入壇灌頂作法。先ず入壇に先立ち、弟子の資格を簡ばずという金剛頂經の特色の一つでもある『真実攝經』の弟子不應簡牅段(H\$210~213)を引用し、次いで三昧耶戒を明かす。三昧耶戒の戒相は我が真言密教においては『大日經』具緣品に説かれる四重禁戒(常不應捨法 捨離菩提心 慳恚一切法 不利衆生行)を受法しているが、經軌によってその説かれる戒相は様々である。以下少しく検索したものをする。当儀軌に説かれる十四三昧耶も特異なものとして検当すべきであらう。

○Guhyatantra (P Vol. 9. No. 429, 223b³⁻⁷)『甚咽耶經』(大正藏 18. 771 a~b)

- ① 今日以後、汝等は仏法僧と菩薩達と明呪と真言等に対し、信を堅固になすべし。
- ② 常に大乘(大印)に対して特信をなすべし。
- ③ 三昧耶を保持する者、友人、師を尊敬すべし。
- ④ 一切の諸天に対し忿怒することなく、(三)時に供養をなすべし。
- ⑤ 他師に仕えたり供養すべきではない。
- ⑥ 常に理屈ぬきに来訪者を供養すべし。
- ⑦ 生類に対し慈しみの心を示し、承事すべし。
- ⑧ (大)乗において歡喜し、福德等を努めて生じ、(真言を)誦持し、熱心に真言行に精進すべし。
- ⑨ 真言藏に示された三昧耶等を守護すべし。三昧耶なき者達に対し、真言や印を授けるべきでない。
- ⑩ 真言藏をよく守護して、自から現証すべし。

○Vairocana-sādhanaopāyikā (P Vol. 77. No. 3489, 358a⁶~358b⁷)『大日經』卷七「供養法次第法中真言行學処品第一」(大正藏 18. 45b~c)

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴一(高橋)

- ① 諸仏諸菩薩と彼らの印と真言と最勝大乘の法とそれを教示する師達を輕んずべきでない。
- ② 諸仏(諸菩薩を)捨てるなかれ。
- ③ 常に心を清らかにして、功德の保持と尊敬と供養と承仕において、出来る限り努力すべし。
- ④ 一切の声聞や緣覺と、彼らの法と賢者と阿闍梨と他師達と、善逝の説かれた法を行ずる新発意達を輕んずべきでない。
- ⑤ 彼らに対し、時に応じ、理に應じて承事すべし。
- ⑥ 天と師に対し、愚童の法性と怒りはなさるべきでない。
- ⑦ 世間の天等を輕んずべきでない。
- ⑧ 一切の成就の根本となる菩提心宝を身命を賭して常に守護すべし。
- ⑨ 一切有情に対し、慈と悲を生じ、彼らの危害を除かんと努力すべし。彼らによって危害が(加え)られても耐えるべきである。
- ⑩ 物と無畏と法との施によって、理の如く有情達を常にできる限り利益に結びつけて、それによって貪欲を遠く捨てるべし。
- ⑪ 三昧耶なき者に印や真言を示すなかれ。三昧耶を保持していても、説法なきものに示すなかれ。
- ⑫ 不放逸となる一切の根である酒を飲まないことを大悲願となすべし。
- ⑬ 要すれば、自と他に危害をなすべきでなく、自と他の利益のみに努力すべし。恥を受くべきでない。

○Jñānamitra: Āryaprajñāpāramitānayaśatapañcāśatikā (P Vol. 77. No. 3471, 296b⁴⁻⁹)

- ① 菩提心を捨てざること。
- ② 大乘の法を捨てざること。
- ③ 仏と大菩薩を捨てざること。
- ④ 真言と印と金剛(杵)を捨てざること。
- ⑤ 金剛阿闍梨を金剛薩埵と同じであると思うこと。

- ⑥ 梵行において悪心をなさないこと。
 ⑦ マンダラに入らない者や、入っても三昧那を守らない者に真言の話しをしないこと。
 ⑧ 意味もない所で身体を損じたり悩んだりしないこと。

その他、『虚空藏菩薩経』（Ākāśagarbhasūtra; Bodhicaryāvatāra-Pañjikā, pp.77~79 Vaidya）（大正蔵 13. 652c~654a）には八根本罪が、『文殊師利根本儀軌経』（Āryamañjuśrīmūlakalpa; Trivandrum Sanskrit Series No. LXX pp.22~24）（大正蔵 20. 848a~b）には八種法が¹⁾説かれる。また無上瑜伽密教においても十四根本罪、八麁罪等が説かれ、密教徒の戒律観をうかがうに足る興味ある問題は多々存するがここでは参考資料の一部を上げるにとどめた。

次に灌頂の作法が説かれる。我が真言密教の灌頂作法ともよく付合しており、瑜伽密教における灌頂の基本的形態を備えたものと思われる。特徴としては秘密灌頂として略 (saṃkṣipta) と中 (madhya) と広 (vistara) の三次第 (krama) を分類するが、ここで言う秘密灌頂 (guhyābhiṣeka) (§159) とは無上瑜伽密教でいう秘密灌頂とは別のもので阿闍梨灌頂 (ācāryābhiṣeka) のことである。以下便宜上真言宗豊山派における『伝法灌頂初夜大阿顛次第』に従ってその記述の一致する所を対照させておく。順序次第には多少の異なりが存するがその依用される真言等は全く同じである。

1) 拙稿「Samaya と Saṃvara — 三昧耶戒の一理解 —」豊山教学大会紀要 第8号 昭和55年。

密教聖典研究会「アドヴァエヴァジュラ著作集一梵文テキスト・和訳(1) —」所収拙論「Mūlapatti」, 「Sthūlapatti」参照。大正大学総合仏教研究所年報 第10号 昭和63年。

	伝法灌頂初夜大阿顛次第	一切金剛出現	備 考
1	受者引入	§149 ㉔	H §218
2	立席進壇前招受者		『広大成就儀軌』（大正蔵 18, 113a）
3	壇前並立		
4	告白	§150	H §220, 221
5	密語	§155 ㉒	H §228
6	投華得仏		
7	金剛解脱密語	§24 ㉑	H §227
8	解覆面密語	§156 ㉓	H §230
9	取投華摩頂密語	§155 ㉒	H §229
10	受者護身法（四礼）	§19 ㉒ ~ ㉓	H §214~217
11	小壇所着席	(§157)	
12	宝冠	}	
13	臂釧	(§160)	
14	受者供養（吉讃）	§161	
15	白払	(§160)	
16	五瓶行道	(§162)	
17	瓶水灌頂	§162	H §232
18	五仏灌頂	㉒ (§34)	(H §323~327)
19	授与塗香		
20	授五股杵	§36 ㉒	H §233
21	招呼金剛名号	§37 ㉒	H §234
22	金篋	§163	『大日経』（大正蔵 18, 12a） 『大日経疏』（大正蔵 39, 669c）
23	明鏡	§164	『大日経』（12a） 『大日経疏』（669c）
24	金輪		
25	法螺	§165	『大日経』（12a） 『大日経疏』（670b）
26	傘蓋行道（吉慶梵語讃）	§160, 161	『大日経疏』（667a~c）
27	小壇所着席		
28	後授五股	§38 ㉒	H §315, 316

29	受者誓言	(\$168)	
30	印可		
31	受者降蓮台着戸外坐	(\$169)	
32	登礼盤後供養		
33	降礼盤礼仏		

以上、当儀軌の概要を羅列したに過ぎないが一つの項目についての詳細は今後の研究課題としたい。

附録 I 節番号・真言番号訂正表

節番号訂正		真言番号訂正	
旧	新	旧	新
SVU(I)			
§ 1 ~ 5	→§68 十六大菩薩の出生		⑬ vajrasattva //
§ 6	→§69 金剛王以下諸菩薩の 出生とウダーナ		
§ 7	→§70 四波羅蜜菩薩の出生		
§ 8	→§71 内の四供養菩薩		
§ 9	→§72 外の四供養菩薩		
§10	→§73 四摂菩薩		
§11, 12	→§74 集会	①	→⑬
§13	→§75 羯磨		
§14	→§76 諸供養の真言	② ~ ⑦	→⑬⑤ ~ ⑭⑥
§15	→§77 集会の印言	⑧, ⑨	→⑭①, ⑭②
§16, 17	→§78 阿闍梨の所作		⑭③ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ //
			⑭④ vajradhātu //
		⑩	→⑭⑤
§18	→§79 五種供養の真言	⑪ ~ ⑮	→⑭⑥ ~ ⑭⑩
§19	→§80 十六供養天女	⑮ ~ ⑳	→⑭⑪ ~ ⑭⑮
§20	→§81 十六大菩薩羯磨印		
§21	→§82 五相成身	⑳ ~ ㉒	→⑭⑯ ~ ⑭㉑
§22	→§83 解印	㉓	→⑭㉔
§22, 24	→§84 金・宝・法・羯の位相	㉕, ㉖	→⑭㉗, ⑭㉘
§24 ante	→§85 奉送	㉘, ㉙	→⑭㉙, ⑭㉚
§25	→§86 供養		
§26	→§87 曼荼羅遍入		⑭㉛ vajrātmaka //
			⑭㉜ vajrātmaka //
			⑭㉝ vajradhātur ahaṃ

旧	新	旧	新
			svayam //
§27, 28	§88 大瑜伽悉地		①78 vajrottiṣṭha //
			①79 vajrāveśa aḥ //

SVU (II)

§29	→§ 89 扱地		
§30	→§ 90 浄地		
§31	→§ 91 作壇		
§32	→§ 92 自身引導		
§33	→§ 93 勧請		
§34	→§ 94 虚空曼荼羅		
§35	→§ 95 金剛眼	④0, ④1	→①80, ①81
§36	→§ 96 金剛輪印	④2, ④3	→①82, ①83
§37	→§ 97 金剛楔	④4, ④5	→①84~①85
§38	→§ 98 被錯		
§39	→§ 99 曼荼羅意想		
§40	→§100 曼荼羅供		
§41	→§101 弟子祈願		
§42	→§102 発露・懺悔等		
§43	→§103 発菩提心		
§44	→§104 弟子加持	④6~④8	→①86~①88
§45	→§105 授与齒木		
§46	→§106 夢想		
§47	→§107 授与臂釧		
§48	→§108 入壇許可		
§49	→§109 墨打ち法	④9, ⑤0	→①89, ①90
§50	→§110 捫線加持	⑤1~⑤3	→①91~①93
§51	→§111 作壇		

金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現一余滴一 (高橋)

旧	新	旧	新
§52	→§112 曼荼羅捫線		①94 vajradhātu //
			①95 vajrakarma //
			①96 vajrasattva //
		⑤4	→①97
§53	→§113 図繪曼荼羅	⑤5	→①98
§54	→§114 捫線の相		
§55	→§115 楔		
§56	→§116 金剛吽伽羅	⑤6	→①99
§57	→§117 風天	⑤7, ⑤8	→②00, ②01
§58	→§118 水天等	⑤9	→②02
§59	→§119 不動明王	⑥0	→②03
§60	→§120 火焚		
§61	→§121 拔楔		
§62	→§122 染色印言	⑥1	→②04
§63	→§123 染色作法	⑥2	→②05
§64	→§124 諸尊布置	⑥3	→②06
§65	→§125 五仏		②07 vajradhātu //
§66	→§126 四波羅蜜	⑥4, ⑥5	→②08, ②09
	(拙稿IVを挿入)		
§67	→§151 加持護念同真言	⑥6, ⑥7	→②54, ②55
§68	→§152 金剛遍入	⑥8, ⑥9	→②56, ②57
§69	→§153 摧罪法	⑦0	→②58
§70	→§154 召入金剛薩埵	⑦1~⑦3	→②59~②61
§71	→§155 投華得仏	⑦4, ⑦5	→②62, ②63
§72	→§156 解覆面	⑦6	→②64
§73	→§157 見曼荼羅	⑦7	→②65
§74	→§158 七種灌頂	⑦8	→②66

旧	新	旧	新
§75	→§159 秘密灌頂 [略次第]		
§76	→§160 [中次第]		
§77	→§161 吉慶讚		
§78	§162 瓶灌頂	⑦9	→②67 vajrāṅkuśa om vajrābhiṣiṅca // ②68 om vajrasattva hūṃ / om vajrābhiṣiṅca // ②69 om mahāsukha //
§79	§163 広灌頂次第	⑧0	→②70
§80	§164 令弟子対鏡		②71 aḥ // ②72 hoḥ //
		⑧1	→②73
§81	§165 授与商法		
§82	§166 授記・安慰	⑧2	→②74
§83	§167 教授秘密一切智	⑧3	→②75
§84	§168 供養・金剛禁戒		
§85	§169 奉送等		②76 akāro mukham // ⑧4 →②77
§86	§170 護摩		
§87	§171 結頌		

Appendix II Sarvavajrodaye mantrāḥ //

- § 2 ① vajrajihva //
- § 4 ② om ḡṛhna vajrasamaye hūṃ vaṃ // (H§894)
- § 5 ③ om vajrajvalānalārka hūṃ abhiṣiṅca mām // (R ⑦)
- ④ om ṭum //
- ⑤ om vajrajvalānalārka hūṃ //
- § 6 ⑥ om vajrajvalānala hana daha paca matha bhaṅja raṇa
hūṃ phaṭ // (cf. H§1431)
- § 7 ⑦ vajranetri bandha sarvavighnān // (cf. H§382, R ②②)
- ⑧ om vajradṛdho me bhava rakṣa sarvān svāhā //
- § 8 ⑨ om hulu hulu hūṃ phaṭ //
- § 9 ⑩ om vajrayakṣa hūṃ //
- §10 ⑪ om drum bandha haṃ //
- ⑫ drum //
- §11 ⑬ om hūṃ vajrapāśa hrīḥ //
- §12 ⑭ om vajrapatāke patamgini ra ṭa //
- §13 ⑮ hrīḥ vajrakāli ruṭ maṭ // (cf. H§1434)
- §14 ⑯ om vajrasikhara ruṭ maṭ //
- §15 ⑰ om vajrakarma //
- ⑱ hūṃ //
- §16 ⑲ vajrabandha vaṃ // (cf. H§299, R ②④)
- §17 ⑳ om vajracakra hūṃ // (H§1280 (1))
- §18 ㉑ om sarvatathāgatakāyavākcittapraṇāmena vajravandanam
karomi // (R ⑥⑤)
- §19 ㉒ om sarvatathāgatapūjopasthānāyātmānam niryātayāmi
sarvatathāgatavajrasattvādhiṣṭhasva mām //
(H§214, R ⑫)
- ㉓ om sarvatathāgatapūjabhiṣekātmānam niryātayāmi

sarvatathāgatavajraratnābhiṣiṇca mām //

(II§215, R 13)

②④ om sarvatathāgatapūjāpravartanāyātmānaṃ niryatayāmi
sarvatathāgatavajradharma pravartaya mām //
(H§216, R 14)

②⑤ om sarvatathāgatapūjākarma ātmānaṃ niryatayāmi
sarvatathāgatavajrakarma kuru mām // (H§217, R 15)

§21 ②⑥ om sarvatathāgatapuṣpapūjāmeghasamudraspharaṇasama-
ye hūṃ // (R 184)

②⑦ om sarvatathāgatadhūpapūjāmeghasamudraspharaṇasama-
ye hūṃ // (R 185)

②⑧ om sarvatathāgatālokapūjāmeghasamudraspharaṇasamaye
hūṃ // (cf. R 187)

②⑨ om sarvatathāgatagandhapūjāmeghasamudraspharaṇasa-
maye hūṃ // (R 186)

③① om sarvatathāgatabodhyaṅgālaṃkāratnapūjāmeghasa-
mudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 188)

③② om sarvatathāgatahāsyalāsyaratikriḍasaukhyānuttarapūjā-
meghasamudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 189)

③③ om sarvatathāgatānuttarabodhyalaṃkāravastrapūjāmegha-
spharaṇasamaye hūṃ // (cf R 190)

③④ om sarvatathāgatacaturbrahmavihārapūjāmeghasamudra-
spharaṇasamaye hūṃ //

③⑤ om sarvatathāgatavajrabodhicittapūjāmeghasamudraspha-
raṇasamaye hūṃ //

③⑥ om sarvatathāgatamahāvajrodbhavadānapāramitāpūjāme-
ghasamudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 193)

③⑦ om sarvatathāgatānuttaramahābodhihāraśīlapāramitāpūjā-

meghasamudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 194)

③⑧ om sarvatathāgatānuttaramahādharmāvabodhikṣāntipāra-
mitāpūjāmeghasamudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 195)

③⑨ om sarvatathāgatasāraparityāgānuttaramahāviryapā-
ramitāpūjāmeghasamudraspharaṇasamaye hūṃ //
(R 196)

③⑩ om sarvatathāgatānuttarasaukhyavihāradhyānapāramitā-
pūjāmeghasamudraspharaṇasamaye hūṃ // (R 197)

④① om sarvatathāgatānuttarakleśacchedasarvadharmasaman-
tajñānamahāprañāpāramitāpūjāmeghasamudraspha-
raṇasamaye hūṃ // (R 198)

④② om sarvatathāgatakāyaniriyātanapūjāmeghasamudraspha-
raṇasamaye hūṃ // (R 191)

④③ om sarvatathāgatavāgniriyātanapūjāmeghasamudrasphara-
ṇasamaye hūṃ // (R 200)

④④ om sarvatathāgatacittaniriyātanapūjāmeghasamudraspha-
raṇasamaye hūṃ // (R 192)

④⑤ om sarvatathāgataguhyapūjāmeghasamudraspharaṇasama-
ye hūṃ // (R 199)

§24 ④⑥ vajrāñjali // (R 23)

④⑦ vajrabandha // (R 24)

④⑧ vajrabandha traṭ // (R 27)

④⑨ vajrāveśa a // (R 28)

④⑩ a //

⑤① tiṣṭha vajra dṛḍho me bhava śāśvato me bhava hṛdayaṃ
me 'dhitiṣṭha sarvasiddhiṃ ca me prayaccha hūṃ
ha ha ha ha hoḥ // (H§227, R 223)

§25 ⑤② om vajramuṣṭi vaṃ // (H§837, R 29)

- §26 ⑤② om sarvapāpam ākarṣaṇa viśodhana vajrasamaya hūṃ
phaṭ // (R ②①)
- §27 ⑤③ om vajrapāṇi visphoṭaya sarvāpāya bandhani pramokṣaya
sarvāpāyagatibhyaḥ sarvasattvān sarvatathāgatavajra-
samaya traṭ // (H\$841, R ②②)
- §28 ⑤④ om vajra muḥ //
- ⑤⑤ vajro 'ham //
- ⑤⑥ ghaṇṭo 'ham //
- §29 ⑤⑦ vajradhātu //
- ⑤⑧ vajrasattvo 'ham //
- ⑤⑨ mahāsamayasattvo 'ham //
- ⑥① samayo 'ham //
- ⑥② samayasattvādhitīṣṭhasva mām //
- §30 ⑥③ samayas tvam //
- ⑥④ samaya hūṃ //
- ⑥⑤ praticcha vajra hoḥ //
- ⑥⑥ om pratigṛhṇa svam imam sattva mahābala //
- §31 ⑥⑦ om vajrasattvaḥ svayaṃ ta iha cakṣūdgḥāṇatatparaḥ /
udghāṭayati sarvākṣo vajracakṣur anuttaram //
he vajra paśya // (H\$230, R ②④)
- §32 ⑥⑧ tiṣṭha vajra //
- §33 ⑥⑨ vajrābhīṣiṇca //
- §34 ⑥⑩ om vajradhātviśvari hūṃ vajriṇi // (cf. H\$323, R ①③)
- ⑦① om vajravajriṇi hūṃ // (H\$324, R ①③)
- ⑦② om ratnavajriṇi hūṃ // (H\$325, R ①③)
- ⑦③ om dharmavajriṇi hūṃ // (H\$326, R ①③)
- ⑦④ om karmavajriṇi hūṃ // (H\$327, R ①③)
- §35 ⑦⑤ om tuṃ // (R ⑦)

- ⑦⑤ vajra tuṣya hoḥ // (H\$311, R ⑦)
- §36 ⑦⑥ om vajrādhipati tvām abhiṣiṇcāmi tiṣṭha vajra samayas
tvam // (H\$233, R ②⑤)
- §37 ⑦⑦ om vajrasattva tvām abhiṣiṇcāmi vajranāmābhīṣekataḥ
he vajranāma // (H\$234, R ②⑥)
- §38 ⑦⑧ om sarvatathāgatasiddhivajrasamaya tiṣṭha eṣa tvām dhā-
rayāmi vajrasattva hi hi hi hi hūṃ // (H\$316, R ②③)
- §39 ⑦⑨ samaya a //
- ⑧① vajrasattva a // (H\$225)
- ⑧② vajro 'ham //
- ⑧③ vajrasattvo 'ham //
- ⑧④ vajrasattva dṛśya // (H\$255)
- ⑧⑤ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ // (H\$255)
- ⑧⑥ samayas tvam // (H\$256 (1))
- ⑧⑦ samayas tvam aham // (H\$256 (1))
- ⑧⑧ vajrasattva //
- ⑧⑨ om vajrasattva hūṃ //
- §40 ⑧⑩ vajrarāja a / vajrarāga a / vajrasādhu a //
vajraratna a / vajrateja a / vajraketu a / vajrahāsa a //
vajradharma a / vajratikṣṇa a / vajrahetu a / vajrabhāsa a //
vajrakarma a / vajrarakṣa a / vajrayakṣa a / vajrasaṃdhi a //
vajralāsyā a / vajramāle a / vajragīte a / vajranṛte a //
vajradhūpe a / vajrapuṣpe a / vajrāloke a / vajragandhe a //
vajrāṅkuśa a / vajrapāśa a / vajrasphoṭa a / vajrāveśa a //
- §41 ⑨① aṅkuśo 'ham / śaro 'ham / tuṣṭir aham //
ratnam aham / vajrasūryo 'ham / ketur aham / smitam
aham //

padmo 'ham / khaḍgo 'ham / cakram aham / jihvāham //
 karmavajro 'ham / varmāham / daṁṣṭro 'ham / muṣṭir
 aham //
 vajradvayam aham / ratnamālāham / vināham / vajranṛ-
 tyakarapallavo 'ham //
 dhūpo 'ham / puṣpo 'ham / dīpo 'ham / gandho 'ham //
 aṅkuśo 'ham / pāśo 'ham / sphoṭo 'ham / ghaṇṭo 'ham //

§42 ⑨① vajrarājo 'ham /
 vajrarāgo 'ham / vajrasādhur 'ham //
 vajragarbho 'ham / vajraprabho 'ham /
 vajrayaṣṭir aham / vajrapritir aham //
 vajranetro 'ham / vajrabuddhir aham /
 vajramaṇḍo 'ham / vajravāco 'ham //
 vajraviśvo 'ham / vajravīryo 'ham /
 vajracanḍo 'ham / vajramuṣṭir aham //
 vajralāsyāham / vajramālāham /
 vajragīty aham / vajranṛtir aham //
 vajradhūpo 'ham / vajrapuṣpo 'ham /
 vajradīpo 'ham / vajragandho 'ham //
 vajrāṅkuśo 'ham / vajrapāśo 'ham /
 vajrasphoṭo 'ham / vajraghaṇṭo 'ham //

§43 ⑨② vajrāṅkuśa jaḥ / vajrapāśa hūṃ /
 vajrasphoṭa vaṃ / vajraghaṇṭe hoḥ //

§44 ⑨③ vajrarāja dṛśya /
 vajrarāga dṛśya / vajrasādhur dṛśya //
 vajraratna dṛśya / vajrateja dṛśya /
 vajrahetu dṛśya / vajrahāsa dṛśya //
 vajradharma dṛśya / vajratikṣṇa dṛśya /

vajrahetu dṛśya / vajrabhāsa dṛśya //
 vajrakarma dṛśya / vajrarakṣa dṛśya //
 vajrayakṣa dṛśya / vajrasaṃdhi dṛśya //
 vajralāsyē dṛśya / vajramāle dṛśya /
 vajragīti dṛśya / vajranṛti dṛśya //
 vajradhūpe dṛśya / vajrapuṣpe dṛśya /
 vajrāloke dṛśya / vajragandhe dṛśya //
 vajrāṅkuśa dṛśya / vajrapāśa dṛśya /
 vajrasphoṭa dṛśya / vajraveśa dṛśya //

§45 ⑨④ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ //

§46 ⑨⑤ samayas tvam // (H\$256 (1))

⑨⑥ samayas tvam aham // (H\$256 (1))

§47 ⑨⑦ vajrarāja / oṃ vajrarāja ja //

vajrarāga / oṃ vajrarāga ho //
 vajrasādhur / oṃ vajrasādhur sa //
 vajraratna / oṃ vajraratna oṃ //
 vajrateja / oṃ vajrateja aṃ //
 vajrahetu / oṃ vajrahetu traṃ //
 vajrahāsa / oṃ vajrahāsa ha //
 vajradharma / oṃ vajradharma hrīḥ //
 vajratikṣṇa / oṃ vajratikṣṇa dhi //
 vajrahetu / oṃ vajrahetu maṃ //
 vajrabhāsa / oṃ vajrabhāsa raṃ //
 vajrakarma / oṃ vajrakarma kaṃ //
 vajrarakṣa / oṃ vajrarakṣa haṃ //
 vajrayakṣa / oṃ vajrayakṣa hūṃ //
 vajrasaṃdhi / oṃ vajrasaṃdhi vaṃ //
 vajralāsyē / oṃ vajralāsyē hūṃ //

vajramāle / om vajramāle trām //
vajragiti / om vajragiti hrīḥ //
vajranṛti / om vajranṛti a //
vajradhūpe / om vajradhūpe hūm //
vajrapuṣpe / om vajrapuṣpe trām //
vajrāloke / om vajrāloke hrīḥ //
vajragandhe / om vajragandhe a //
vajrāṅkuśa / om vajrāṅkuśa jaḥ //
vajrapāśa / om vajrapāśa hūm //
vajrasphoṭa / om vajrasphoṭa vaṃ //
vajrāveśa / om vajrāveśa a //

- §48 ⑨⑧ jaḥ hūm vaṃ hoḥ // (H§256 (3))
§49 ⑨⑨ vajradhātu dṛśya / jaḥ hūm vaṃ hoḥ samayas tvam /
samayas tvam aham //
⑩⑩ vajradhātu //
⑩① om sarvatathāgatamahāyogīśvara hūm //
⑩② vajradhātu dṛśya / jaḥ hūm vaṃ hoḥ samayas tvam /
samayas tvam aham //
⑩③ vajradhātu //
⑩④ om vajrasattva hūm //
⑩⑤ om vajraratna hūm //
⑩⑥ om vajradharma hūm //
⑩⑦ om vajrakarma hūm //
§50 ⑩⑧ sattvavajri adhiṣṭhasva mām //
⑩⑨ ratnavajri adhiṣṭhasva mām //
⑩⑩ dharmavajri adhiṣṭhasva mām //
⑩⑪ karmavajri adhiṣṭhasva mām //
§52 ⑩⑫ vajrajñānam // (H§278 (1))

⑩⑬ samayas tvam / ānayasva / aho sukhaḥ / sādhu sādhu //
sumahās tvam / rūpodyotā / arthaprāptiḥ / ha ha hūm
ha //
sarvakārin / duḥkhacchedaḥ / buddhabodhiḥ / pratiśa-
bdaḥ //
suvaśi tvam / nirbhayas tvam / śatrubhakṣaḥ / sarvasid-
dhiḥ //
mahārati / rūpaśobhā / śrotrasaukhyā / sarvapūjā //
prahlāḍini / phalāgāmi / sutejāgri / sugandhāṅgi //
āyāhi jaḥ / āhi hūm hūm / he sphoṭa vaṃ / ghaṇṭa aḥ
aḥ // (H§278 (2) ~ §283 (12)), R ⑩⑭ ~ ⑩⑮)

- §55 ⑩⑯ samayas tvam //
⑩⑰ suratas tvam //
⑩⑱ ṭakki hūm jaḥ //
⑩⑲ ṭakki jaḥ hoḥ //
§57 ⑩⑳ dharma a //
§60 ⑩㉑ om akāro mukhaṃ sarvadharmāṇām ādyanutpannatvāt //
§61 ⑩㉒ hūm suṃ hūm //
⑩㉓ om vajradṛḍho.....//
⑩㉔ a siṃ a //
⑩㉕ hūm gaṃ hūm //
⑩㉖ tra vā tra //
⑩㉗ hrīḥ maṃ hrīḥ //
⑩㉘ a gaṃ a //
§64 ⑩㉙ om cittapratiṣṭhā karomi // (H§20)
⑩㉚ om bodhicittam utpādayāmi // (H§22)
⑩㉛ om tiṣṭha vajra // (H§24)
⑩㉜ om vajrātmako 'ham // (H§25)

- ⑬① om yathā sarvatathāgatās tathāham // (H\$28)
- §67 ⑬② om vajraratnābhiṣiṅca //
- §68 ⑬③ vajrasattva //
- §74 ⑬④ om sarvatathāgatapādavandanam karomi // (H\$192)
- §76 ⑬⑤ vajrapuṣpe hūṃ //
- ⑬⑥ om vajragandhe //
- ⑬⑦ om vajradhūpe hūṃ //
- ⑬⑧ akāro mukhaṃ sarvadharmāṇām ādyanutpannatvāt //
- ⑬⑨ hūṃ vajrāloke //
- ⑬⑩ om vajrasattva hūṃ //
- §77 ⑬⑪ om vajrasattva hūṃ //
- ⑬⑫ om vajrasamāja jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ //
- §78 ⑬⑬ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ // (H\$209(23))
- ⑬⑭ vajradhātu dṛṣya //
- ⑬⑮ jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ / samayas tvam / samayas tvam aham//
(H\$255, 256)
- §79 ⑬⑯ om sarvatathāgatapuṣpapūjāmeghasamudraspharaṇasama-
ye hūṃ //
- ⑬⑰ om sarvatathāgatagandhapūjāmeghasamudraspharaṇasa-
maye hūṃ //
- ⑬⑱ om sarvatathāgatadhūpapūjāmeghasamudraspharaṇasama-
ye hūṃ //
- ⑬⑲ [om] akāro mukhaṃ sarvadharmāṇām.....//
- ⑬⑳ om sarvatathāgatadīpapūjāmeghasamudraspharaṇasamaye
hūṃ //
- §80 ⑬㉑ om sarvatathāgatasarvātmaniryātanapūjāspharaṇakarma-
vajri āḥ // (H\$506 ㉑)
- ⑬㉒ om sarvatathāgatasarvātmaniryātanapūjāspharaṇakarmā-

- gri jaḥ // (H\$506 ㉒)
- ⑬㉓ om sarvatathāgatasarvātmaniryātanānurāgaṇapūjāsphara-
ṇakarmavāṇe hūṃ hoḥ // (H\$507 ㉓)
- ⑬㉔ om sarvatathāgatasarvātmaniryātanāsādhukārapūjāspha-
raṇakarmatuṣṭi āḥ // (H\$507 ㉔)
- ⑬㉕ om namaḥ sarvatathāgatakāyābhiṣekaratnebhyo vajrama-
ṇi om // (H\$509 ㉕)
- ⑬㉖ om namaḥ sarvatathāgatasūryebhyo vajratejini jvala
hriḥ // (H\$509 ㉖)
- ⑬㉗ om namaḥ sarvatathāgatāśāparipūraṇacintāmaṇidhvajāg-
rebhyo vajradhvajāgri trāṃ // (H\$510 ㉗)
- ⑬㉘ om namaḥ sarvatathāgatamahāprītiprāmodyakarebhyo va-
jrahāse haḥ // (H\$510 ㉘)
- ⑬㉙ om sarvatathāgatavajradharmasamatāsamādhībhiḥ stuto-
mi mahādharmāgri hriḥ // (H\$512 ㉙)
- ⑬㉚ om sarvatathāgataprajñāpāramitānirhārāiḥ stutomi mahā-
ghoṣānuge dham // (H\$512 ㉚)
- ⑬㉛ om sarvatathāgatacakrākṣaraparivartādisarvasūtrāntana-
yaiḥ stutomi sarvamaṇḍale hūṃ // (H\$513 ㉛)
- ⑬㉜ om sarvatathāgatasamdhābhāṣabuddhasaṃgītibhir gāyan
stutomi vajravāce vaṃ // (H\$513 ㉜)
- ⑬㉝ om sarvatathāgatadhūpameghaspharaṇapūjākarme kara
kara // (H\$515 ㉝)
- ⑬㉞ om sarvatathāgatapuṣpaprasaraspharaṇapūjākarme kiri
kiri // (H\$515 ㉞)
- ⑬㉟ om sarvatathāgatālokaśālaspharaṇapūjākarme kara kara
// (H\$516 ㉟)
- ⑬㊱ om sarvatathāgatagandhasamudraspharaṇapūjākarme ku-

- ru kuru // (H\$516 ①⑥)
- § 82 ①⑥⑦ om vajrātmako 'ham //
- ①⑥⑧ om svabhāvaśuddho 'ham //
- ①⑥⑨ om sarvasamo 'ham //
- § 83 ①⑦⑩ vajrasattva muḥ // (cf. H\$309)
- § 84 ①⑦⑪ om vajraratnābhiṣiṇca // (H\$310)
- ①⑦⑫ sarvamudrāṃ me dṛḍhikuru vajrakavacena vaṃ //
(H\$310)
- § 85 ①⑦⑬ om kṛto vaḥ sarvasattvārthaḥ siddhiṃ dattvā yathānugā /
gacchadhvaṃ buddhaviṣayaṃ punar āgamanāya tu //
(H\$317)
- ①⑦⑭ vajrasattva muḥ //
- § 87 ①⑦⑮ vajrātmako ['ham] //
- ①⑦⑯ vajrātmako ['ham] //
- ①⑦⑰ vajradhātur ahaṃ svayaṃ //
- § 88 ①⑦⑱ vajrottiṣṭha //
- ①⑦⑲ vajrāveśa aḥ //
- § 95 ①⑧① vajradṛṣṭi maṭ //
- ①⑧② vajrasattva uttiṣṭha //
- § 96 ①⑧③ om vajramaṇḍala hūṃ jaḥ //
- ①⑧④ om mahāvajracakrādhitiṣṭha sidhya hūṃ //
- § 97 ①⑧⑤ om vajrakila kilaya sarvavighnaṃ bandha hūṃ phaṭ //
- ①⑧⑥ om gha gha ghātaya ghātaya sarvaduṣṭān phaṭ /
kilaṃ kilaya sarvapāpān phaṭ /
vajrakila vajradhara ājñāpayati svāhā //
- §104 ①⑧⑦ samaya aḥ //
- ①⑧⑧ surate samayas tvaṃ hoḥ / vajra sidhya yathāsukham //
- ①⑧⑨ vajrasattva vajraratna vajradharma vajrakarma //

- §109 ①⑧⑩ hūṃ trāḥ hriḥ aḥ āḥ //
- ①⑧⑪ diptadṛṣṭyāṅkuśi jaḥ // (H\$370 ②)
- §111 ①⑧⑫ anyonyānugatāḥ sarvadharmāḥ parasparānupraviṣṭāḥ sa-
rvadharmā atyantānupraviṣṭāḥ sarvadharmā om vaj-
rasattva hūṃ //
- ①⑧⑬ vajradṛṣṭi maṭ // (H\$370 ①)
- ①⑧⑭ om vajrasamaya sūtraṃ mātikrama hūṃ // (H\$851)
- §112 ①⑧⑮ vajradhātu //
- ①⑧⑯ vajrakarma //
- ①⑧⑰ vajrasattva //
- ①⑧⑱ om vajrasamaya sūtraṃ mātikrama hūṃ //
- §113 ①⑧⑲ jaḥ jaḥ jaḥ //
- §116 ①⑧⑳ hūṃ vaṃ hūṃ //
- §117 ①⑧㉑ vajra hāṃ bandha //
- ①⑧㉒ vajra hāṃ bandha //
- §118 ①⑧㉓ namaḥ samantavajrāṇāṃ candamahāroṣaṇa sphoṭaya hūṃ
traṃ hāṃ mām //
- §119 ①⑧㉔ om āḥ hūṃ //
- §122 ①⑧㉕ om vajracitrasamaya hūṃ // (H\$856)
- §123 ①⑧㉖ om vajracitrasamaya hūṃ // (H\$856)
- §124 ①⑧㉗ om vajravegākrama hūṃ // (H\$864)
- §125 ①⑧㉘ vajradhātu //
- §126 ①⑧㉙ sattvavajri //
- ①⑧㉚ vajrāveśa aḥ //
- ①⑧㉛ ratnavajri //
- ①⑧㉜ dharmavajri //
- ①⑧㉝ karmavajri //
- §128 ①⑧㉞ om sarvasaṃskārapariśuddhadharmate gaganasamudgate

mahāyānaparivāre svāhā //

- §134 ②14 om vajrasattva hūṃ //
- ②15 om vajrasattva hūṃ //
- §135 ②16 om vajrodghāṭayasamaya praveśaya hūṃ // (H\$858, R ⑩)
- §136 ②17 om vajrasattva hūṃ //
- ②18 [om] vajrodaka hūṃ //
- §137 ②19 a //
- §138 ②20 vajradhātu a //
- ②21 vajro 'ham //
- ②22 vajradhātur aham //
- ②23 vajrāveśa aḥ //
- ②24 vajraghaṇṭāham //
- ②25 vajrāveśo 'ham //
- §139 ②26 om vajrasamāja jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ //
- §140 ②27 jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ samayas tvam / samayas tvam aham //
- §141 ②28 om vajrasphara khaṃ //
- ②29 akāro mukhaṃ.....//
- ②30 om //
- ②31 hūṃ //
- §142 ②32 akāro.....//
- ②33 namo vajrasya (ca) diśi diśi vajrapāṇe rakṣa rakṣa
svāhā //
- ②34 agne ehy ākapilākapila jvala jvala daha śikhītoli
virūpakṣa svāhā //
- ②35 yamāya svāhā //
- ②36 sarvabhūtabhayaṃkara kuru kuru svāhā //
- ②37 ṭṛ ṭṛ puṭa ṭṛ ṭṛ śikhītoli virūpakṣa svāhā //
- ②38 om śvasa khākha khākha svāhā //

- ②39 om kuverāya svāhā //
- ②40 om jum jum śiva svāhā //
- ②41 [om] ūrdhvabrahmane svāhā / sūryāya grahādhipataye
svāhā / candrāya nakṣatrādhipataye svāhā //
- ②42 [om] adhaspṛthivyai svāhā / asurebhyaḥ svāhā /
nāgebhyaḥ svāhā //
- §149 ②43 om sarvayogacittam utpādayāmi //
- ②44 surate samayas tvam ho vajrasiddhir yathāsukham //
- ②45 samayas tvam // (H\$218)
- ②46 samaya hūṃ // (H\$219)
- ②47 vajrāṅkuśa jaḥ //
- ②48 vajrapāśa hūṃ //
- ②49 vajrasphoṭa vaṃ //
- ②50 vajrāveśa aḥ //
- §150 ②51 om vajrodaka ṭha // (H\$223)
- ②52 hūṃ trāṃ hrīḥ kaṃ //
- ②53 a //
- §151 ②54 vajrāveśa aḥ // (H\$224)
- ②55 vajrasattva aḥ aḥ aḥ aḥ //
- §152 ②56 hūṃ trāḥ hrīḥ aḥ //
- ②57 vajrasattva aḥ aḥ aḥ aḥ //
- §153 ②58 om sarvapāpadahanavajrāya svāhā // (H\$1144 ①)
- §154 ②59 he vajrasattva / he vajraratna / he vajradharma /
he vajrakarma //
- ②60 nṛtyasattva nṛtyavajra //
- ②61 brūhi vajra // (H\$1038 ④)
- §155 ②62 praticcha vajra hoḥ // (H\$228)
- ②63 om pratigṛhṇa tvam imaṃ sattva mahābala // (H\$229)

§156 ②64 om vajrasattvaḥ svayaṃ te 'dya cakṣūdghāṭanatatparaḥ /
udghāṭayati sarvākṣo vajracakṣur anuttaram //
he vajra paśya // (H§230)

§157 ②65 tiṣṭha vajra //

§158 ②66 om mahāsukha vajrasattva jaḥ hūṃ vaṃ hoḥ suratas
tvam

§162 ②67 om vajrāṅkuśa / om vajrasattvābhiṣiṅca //

②68 om vajrasattvābhiṣiṅca //

②69 om mahāsukha //

§163 ②70 om vajranetrāpahara paṭalam hriḥ //

§164 ②71 aḥ //

②72 hoḥ //

②73 ā vajrasattva //

§166 ②74 om eso 'haṃ vyākaroni tvāṃ vajrasattvas tathāgato
bhavadurgatita uddhṛtyātyantabhavaṃ siddhayet /
he vajranāmatathāgata siddhya samayas tvam bhūr
bhuvaḥ svaḥ //

§167 ②75 mahāsamaya hana phaṭ // (H§608)

§169 ②76 akāro mukhaṃ.....//

②77 om ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddhalocane sarvārtha-
sādhane svāhā //

四種心真言と開示悟入について

中 條 賢 海

古来『大日経』の解釈に当っては、東密では弘法大師請来の、『大日経疏』二十卷（以下『大疏』）を用いるのを常としているが、台密では慈覚大師請来の、『大日経義釈』十四卷（以下『義釈』）を用いるのを伝統としている。そもそもこの両書はともに、善無畏の述、一行の記とされているが、前者は一行の記する所そのままのものであるのに対して、後者は智儼・溫古の再治せるものであって、多くの改変等がなされており、そのために両書の間には、相互に異なる点が存在しているのである。しかしてそうした相違点の中で、従来特に台密の徒が、円密一致の証拠として重要視しているのが、『義釈』の悉地出現品の釈中にのみ存在する（『大疏』欠）、所謂四種心真言たる四種阿字（五転阿字）に、『法華経』方便品の〈開示悟入〉を配釈する部分なのである。そしてこれはまた、『大疏』と『義釈』両書の優劣問題、十住心の順序に関する問題、『菩提心論』の作者に関する問題などと、深く結びついているものであるが、いまそれらの問題については暫く措くこととして、本稿でははじめに、『法華経』方便品の〈開示悟入〉とは、本経では本来如何なる意義を有するものであるのかを、まず明らかにし、次いでその本来の意義と、『義釈』に於いて四種阿字に配釈されたところの〈開示悟入〉の意義とを、比較検討し、更にその結果をもとにして、別な角度から、『大疏』に於ける四種阿字の意義解明を、試みてみることにする。

1) 安然の『八家秘録』や、円珍の『大日経義釈目錄』を参照のこと。

2) 拙論「如来の四種心真言について」(1)(2) 豊山教学大会紀要12, 豊山学報31, 参照。

ISSN 0910-8912

Nos. 33

March 1988

豊山学报

豊
山
学
報

第三十三号

第三十三号

昭和63年3月

豊山宗学研修所発行



昭和六十三年三月

BUZAN GAKUHŌ

JOURNAL of BUZAN STUDIES

Edited

by

BUZAN-SHŪGAKU-KENSHŪ-JO

RESEARCH CENTER FOR THE BUZAN STUDY

No. 40-8, 5-CHŌME, ŌTSUKA, BUNKYŌ-KU, TŌKYŌ.

contents

Kenzō Hōjyo : On the Dhāraṇī-theory in the Eighty Chapters' Gaṇḍavyūha.....	(1)
Sumio Tanaka : Śākyamuni and Asceticism.....	(21)
Gikō Sakaki ; About "the Debate on Doctorine" 論議 in the Shingi School.....	(35)
Miscellaneous	(43)
Keiya Noguchi ; The <i>Nairātmyā-maṇḍala</i> in the <i>Samputo-dbhavatantra</i>	(64)
Kenkai Chūjo ; On "Catur-hṛdaya" and "Samādāpana-saṃ-darśana-pratibodhana-avatāraṇa"	(80)
Hisao Takahashi ; A supplement of Vajradhātumahāmaṇḍa-lopāyika-sarvavajrodaya	(138)